

情緒障害

(3) 学習面や行動面の困難さへの対応

① 心理面での困難への対応

選択性かん黙の状態にある児童生徒への対応は、話さないという状態だけに注目してしまふと、話をさせようという働きかけが多くなります。しかし、そうした働きかけがさらに極度の緊張と萎縮を生じさせ、対人不安やひきこもりなどの二次的な不適応を引き起こす可能性もあります。本人の意思でたくなに話さないと決めているわけではなく、話そうとしても話せないという視点に立ち、緊張や不安、恐怖心を取り除くようにかかわることが大切です。対応としては、例えば、次のような工夫が考えられます。「身振りや仕草等で意思の疎通を図る」、「自己評価の低下につながらぬようプライドに配慮する」、「安定した受容的なかわりにより緊張や不安を軽減する」、「得意な活動を見つけ自信をもたせる」、「個性としてクラスメートへの理解を図る」などです。

選択性かん黙の状態は、環境の変化や成長とともに改善する例も多く見られます。話ができなくても取り組みやすい課題や場面設定などを工夫し、安心できる環境づくりを心がけることが大切です。日常的に家庭とは連絡を密にし、連携を図るようにし、必要に応じて専門機関を活用することも大切です。

不登校については、文部科学省「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」（2003）において、対応の視点として、「将来の社会的自立に向けた支援」、「連携ネットワークによる支援」、「将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割」、「働きかけることやかわりをもつことの重要性」、「保護者の役割と家庭への支援」の5つが挙げられています。不登校は、その背景となる心理的要因が一人一人異なり、経過とともに状態像が変化していくこともあります。年齢と発症の時期や経過を的確に把握した上で、指導計画や指導内容を設定することが大切です。また、登校が可能になってからもカウンセリングなどの対応が必要な場合もあることにも留意する必要があります。

情緒障害は、現れている状態像は異なっても、共通に何らかの心理的要因が大きく関与しています。学校における配慮としては、対象の児童生徒との信頼関係をつくること、安心できる場所を確保したり時間を提供したりして、学校が安心して過ごせる場所になるようにすることが基本になります。

② 学習面、行動面の困難への対応

選択性かん黙の児童生徒への学習面、行動面の対応で配慮すべきことは、話せないこと

や学習活動に積極的に参加できないことから、自己評価が下がり、自信や意欲を失いがちな状態に陥らないよう、自己評価を高める工夫をすることです。例えば、授業の中で、話さなくても参加できる活動や取り組みそうな課題はたくさんあります。無理強いせず本人の意思に委ねながら誘いかけ、取り組めた経験を増やします。スポーツや工作、絵画、音楽などに興味がある場合には、好きなことや得意なものを認め、学級の中で活躍できる場面を設定します。話すことではなく、活動に参加することを目的に対応します。周りの児童生徒にもそのことをきちんと伝え、さりげない誘いかけをするような関係づくりを心がけることで、教室の中に安定できる居場所をつくるようにしていきます。また、家庭との連携も不可欠です。学校で取り組めなかった課題やレポート、作品などは家に持ち帰り仕上げることも認めるようにします。

不登校の場合は、授業の空白期間ができてしまうため、学習面に大きな課題を抱えてしまいます。登校したい気持ちはあっても、学習の遅れに不安があったり、学習意欲が減退していたりする場合があります。また、家庭に居ると生活リズムも乱れがちになります。保護者と児童生徒の心理状態や生活リズムの状態について情報交換を密にしながら、状態に応じた対応の工夫が必要になります。学習面については、必ずしも学年相応の内容に限らず、本人の学習進度に合わせてたり、興味や関心のある教科を優先したりして、内容が理解でき成就感や達成感が得られる経験を積むことで、学習のリズムがつくように対応を工夫します。状態に応じて、家庭訪問をしたり、連絡ノートや課題プリントの添削などを活用したりして、学校や教員と信頼できるつながりがもてるようにします。少しずつ登校できるようになってきても、すぐに教室に入ることを求めず、保健室や図書室、特別教室など本人が居られる場所を確保するようにします。久しぶりに会うクラスメートにも、あまり大騒ぎしないように指導することも大切です。